

「洗礼者ヨハネの道備え」

2015年04月28日

ルカによる福音書 3章1節～6節。皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

マタイ、マルコ、ルカの共観福音書は「福音の初め」は洗礼者ヨハネの活動から始まったと伝えている。ルカは、その時を「皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき」と記している。神の言葉が祭司ザカリアの子ヨハネに降った。ヨハネはエルサレム神殿の祭司になるように育てられたに違いない。しかし、ヨハネは墮落し切った神殿からは真実な信仰は起こり得ないと思ったのであろう。神殿を捨て、イスラエル民族の信仰の原点である荒れ野に立った。荒れ野は、モーセに導かれて出エジプトした後、40年間放浪した苦難の場所である。飢え渴き、不信仰に陥り、外敵の恐怖に晒される荒れ野でイスラエル人は信仰を鍛えられ、神を知った。

ヨハネは荒れ野を流れるヨルダン川沿いの地方一行で、罪の赦しを得るよう、悔い改めを求める洗礼活動を始めた。マタイ、マルコ福音書は「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物にしていた」と記している。極度の禁欲を自らに課し、神を真っ直ぐに信じる悔い改めの洗礼を受けるように激しく迫った。洗礼は罪に死んで、神に向かって立ち上がる生き方の方向転換である。

ルカは、ヨハネのこの活動を旧約聖書の第二イザヤの預言の成就として捉えている。イザヤ書40章3節～5節に「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る」と書かれている。紀元前539年、バビロンに捕囚されていたイスラエル人にペルシャのキュロス王から念願のエルサレムへの帰還が許可された。バビロンからエルサレムまでの荒れ野に神のための道が備えられる。谷は埋められ、山と丘は削られ、広く平らな道ができる。屈辱の捕囚からの解放という主の栄光が表された道を辿って帰還できると呼びかける歓喜の声である。

ヨハネが悔い改めの洗礼活動によって開いた主イエスのための道備えは、イスラエル人が喜びの中でエルサレムに帰還した道備えの預言の成就である。道筋は真っ直ぐに、卑屈の谷は埋められ、高慢の山と丘は削られ、神の救いを仰ぎ見る平らな道ができる。これが、荒れ野で叫んだヨハネが備えた主イエスが歩まれる道となる。ヨハネの激しく迫る洗礼活動は人々を生ける神に心を向けさせた。この務めを果たすために、ヨハネは主イエスの先導役として用いられた、旧約聖書最後の預言者であった。